段々大きく聞え出す。
山の上の女の家までの道は坂だ。
宇和島街道と同じ方向だ。
僕は一定の間隔を置いて、リズミカルに木刀を大地に下ろす。
それが山彦となつて、眞つ白な山々にこだまする。
素的な妙音が、鳴つては消え、消えては鳴りながら、段々麓の町から遠ざかつて行く。
足の爪先が冷えて、幻想が其處から崩し出す。
僕は寸時迷つた。
山の上の女の家が、緊張した僕の目に映じた。
立ち寄つて體を休めなければ、僕は凍死するかも知れない。と思つたのだ。
爾時無盡意菩薩、卽從座起、偏袒右肩、合掌向佛。
涙を喉で焦すやうな聲を新たにして、僕は女の家の入口の障子を開けた。
布團やインバネスの雪を拂つて、板敷へ脱ぎ、木刀を擔さえて座敷に上る。